



北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	療養者の転倒事故に関する看護学生のアセスメント内容の分析
Author(s)	福良, 薫; 大日向, 輝美; 田野, 英里香; 堀口, 雅美; 稲葉, 佳江
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要, 第 8 号: 27-32
Issue Date	2005 年
DOI	10.15114/bshs.8.27
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/4905
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n13449192827.pdf

- ・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- ・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- ・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

療養者の転倒事故に関する看護学生のアセスメント内容の分析

福良 薫、大日向輝美、田野英里香、堀口雅美、稲葉佳江

札幌医科大学保健医療学部看護学科

看護者に必要とされる転倒事故予見能力の基盤を卒業時まで育成するための基礎資料を得ることを目的とし、転倒事故に関する学生のアセスメントの実態を調査した。同意の得られた4年次看護学生18名に易転倒状態にある紙上事例に対するアセスメントを行ってもらった。学生の記述を、ゴードンの「機能面から見た健康パターン」を用いて事故防止の観点から内容の分析を行った。

対象学生のアセスメントの特徴として、事例に表されている身体機能面には目を向けやすいが、身体機能以外の療養生活のあり方や人間の行動特性には着眼しにくい傾向があった。さらに、身体機能面と療養生活のあり方や人間の行動特性を関連付けた転倒事故予測が不十分であることが明らかになった。また、環境要因は約半数の学生が着眼していたが、看護体制など看護者側の要因に目を向けた学生はいなかった。今後対象数を増やし、学生のアセスメントの実態をより明確にし、療養者の生活全体を見通した転倒事故予見能力の育成に向けた教育方法を検討する必要があると考えられた。

<キーワード> 転倒事故、看護基礎教育、看護学生

Analysis of ability of student nurse to assess the risk of an accident involving a fall of a client

Kaoru FUKURA, Terumi OHINATA, Erika TANO, Masami HORIGUCHI, Yoshie INABA

Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

The purpose of this study was to investigate the risk assessment ability of students. This was done by asking them to provide a written assessment of the risk of such accidents so as to evaluate their nursing ability at the time of graduation. Eighteen fourth-year nursing students agreed to participate in the study. We analyzed the assessments of the students from the point of view of accident prevention considering Gordon's Functional Health Pattern.

The results showed the following characteristics. They found it easy to pay attention to the body function pattern, but they did not pay attention to the conditions of life and the characteristic patterns of human actions. It also became clear that the assessments did not sufficiently consider the relationships among these factors. Though about half of the students paid attention to the environmental conditions that could lead to a fall, most emphasized the physical condition of the person being cared for and none considered the nursing system and its relation to the patient. We need to increase the number of targets in the future and improve the assessment abilities of students. To do so it is necessary to examine educational methods to improve systematic risk assessment ability.

Key Words : Incidence of stumbling, Basic nursing education, Student nurse

Bull. Sch. Hlth. Sci. Sapporo Med. Univ. 8:27-32 (2005)

I はじめに

一般に医療事故を防ぐには、患者側要因、状況要因、ハード要因、療養環境要因、看護側要因の各要因を検討していく必要があるといわれている¹⁾。しかし、看護独自の業

務である「療養上の世話」に関する医療事故の半数を占める転倒・転落事故(以下、転倒事故)は、主たる要因が患者側にあるため、事故防止が困難とされている²⁾。なぜなら、患者側要因は加齢、疾病、障害といった易転倒性に関わる要因に加え、服薬や心理的要因が複雑にからんで発生するため予測が困難で、予防対策が取りにくいからであ

る²⁾。

転倒リスクにつながる患者側要因のうち身体的要因は、運動・感覚機能の低下により麻痺が生じたり、ふらついたり看護者の目に見えやすく、気付きやすい。一方、身体的要因と同程度に重要な転倒リスクである心理的要因は、見えにくく気付きにくい。自分の体力・筋力以上の行動を取ろうしたり、看護者の介助を求めなかったりする行動の背景には、自尊心や遠慮する気持ち、あるいは闘病意欲など特徴的な療養者の心理的要因があるといわれており³⁾、心理的要因を十分にアセスメントしなければ療養者の行動は予測できない。

そのため転倒を予防し、自尊心を損なうことなく日常生活を支援するためには、看護者が療養者の身体的状況のみならず、心理状況や生活全体を把握することが重要である⁴⁾。今回我々は、卒業間近の看護学生が事故防止の観点からどのように看護の対象者の生活をアセスメントし、転倒事故を予測しているのかを把握するために、易転倒状態にある紙上事例を用いて調査を行ったので報告する。

II 研究対象および研究方法

1. 研究対象および調査時期

本学看護学科の4年次学生54名に依頼し、同意の得られた18名の学生を研究対象とした。調査は、平成16年3月、教育課程がすべて修了した卒業間近の時点で実施した。

2. 研究方法

1) データ収集方法

転倒の危険のある紙上事例を提示し、その事例を黙読の後、発生するおそれのある事故とその事故発生の理由についての分析・解釈について自由記述で回答してもらい、学生が記述した内容をデータとした。

使用した事例は、全身の筋力が低下し、消耗性疲労により活動性が低下している筋無力症患者とし、事故発生を検討できるよう身体的要因、心理的要因および環境要因を組み込んで作成し、提示した(図1)。

2) 分析方法

看護の対象者を系統的に把握し、健康上の課題を明確にする方法として様々な枠組みが用いられている。今回、最も一般的に用いられている枠組みであるゴードンの機能面から見た11の健康パターンを用いて対象学生のアセスメント内容を分析した。ゴードンの11のパターンとは主に身体的側面からなる、栄養-代謝、排泄、活動-運動、性-生殖、睡眠-休息、認知-知覚の6パターン、主に心理・社会的側面からなる健康認識-健康管理、役割-関係、自己知覚-自己概念、コーピング-ストレス耐性、価値-信念の5パターンで構成されている。ただし、人間にとってこれらの身体的、心理・社会的機能はそれぞれ影響しあうものであるため、情報は重複して分類されることがある。今回提示した事例に対して、機能分類ごとに着眼させたい情報とその情報から転倒事故をどの様に予測するのかその理由を表1に示した。分析は以下の手順で行った。

- ①学生の記述内容から着眼している機能面とそのアセスメント内容を抽出する。
- ②患者側の要因以外に医療事故の要因といわれている環境要因や看護体制などへの着眼内容を抽出する。
- ③対象学生ごとに①、②からどの様に対象を把握し、転倒リスクをアセスメントしているのか整理した。さらに個々のアセスメント内容の特徴を比較して対象集団の特徴を質的に分析する。

なお、分析に当たっては複数の研究者により解釈の検討を重ね、妥当性を高めた。

3. 倫理的配慮

研究協力に関しては、研究の目的、調査の内容、匿名性の保証、途中で中止することも可能で、その際不利益を被らないことを説明し、承諾書の署名をもって同意の確認をした。

Aさん、63歳、女性、筋無力症の疑いにより、3日前より精査目的で入院中。6ヶ月ほど前より顔が重く感じるようになり、徐々に動きが悪くなり、最近は特に午後から症状が強く、日によっては開眼しようとしても顔が上がらないことがある。もともと近視と老眼で眼鏡を使用していたが、眼瞼下垂のせいで、なお見えづらくなっている。また、最近は上下肢にも力が入らなくなっており、入院後も摺り足で歩いている姿が見られるが、症状は日によってあるいは1日の中でも変動したりと、固定していない。現在、不自由はあるが、症状が強い日はトイレと洗面以外はベッド上で過ごし、日常生活は自立して行えている。Aさんはもともと10回/日の排尿があり、就寝中にも排尿のため覚醒する。そのため夕方からは水分を控えるようにしていたが、それでも夜間に1度は排尿があり、とても面倒と感じていた。Aさんの病室は病棟の奥で、トイレと洗面所から10mほど離れている。本日は朝から数種類の検査が入っており、昼食時には疲労感を訴えていた。また、午後からは37.8℃の微熱や咳嗽といった風邪様の症状が出始め、倦怠感が強く食欲も低下し、夕食は1/2程度の摂取であった。準夜勤務のナースがトイレから出るAさんを見ると、特に右目の眼瞼下垂が強く現れており、摺り足様歩行であり、咳嗽も強く見られていた。

図1 使用した事例の概要

表1 機能分類別の着眼させたい点とアセスメントのポイント

機能分類	着眼させたい情報	転倒事故を予測した理由
健康認識－健康管理	<ul style="list-style-type: none"> ・症状の強い日はベッド上で過ごす ・夜間の排尿を避けるために夕方から水分を控える 	自分の身体状況を把握し、生活をコントロールできる能力を持っていると考えられる。したがって運動能力が低下していても何とか自力で行動しようとするのが予測される。
栄養－代謝	<ul style="list-style-type: none"> ・ここ最近、上肢の動きが悪い ・本日午後から発熱、咳嗽など風邪症状がある ・食欲低下、夕食は1/2摂取 	入院前の食事が必要量を満たしていたのか確認する必要がある。さらにこの日、発熱、咳嗽によるエネルギーの消耗がある一方で、食欲低下による摂取エネルギーの不足があり、疲労感、倦怠感を増強させることが予測される。
排泄	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレの回数はもともと10回/日 ・就寝後も1度は排尿があるため面倒と感じている ・トイレまでの距離は約10m 	トイレ回数が多い上、夜間に排尿があること、トイレまでの距離が遠いことからトイレの往復には困難がある。特にトイレまでの往路は排尿を我慢していることや夜間覚醒時の認識力の低下などにより転倒の危険がある。
活動－運動	<ul style="list-style-type: none"> ・6ヶ月前から症状が出現 ・上下肢の脱力感と摺り足歩行 ・症状には日内変動があり、夕方から夜間に強くなる 	63歳の初老の女性であること、筋無力症の症状が6ヶ月前から出現していたことによりすでに筋力低下がある。症状としての上下肢の脱力感により歩行時の転倒は容易に予測される。特に夕方から夜間の歩行時は危険性が高い。
性－生殖	・63才女性	閉経後の女性であり骨のカルシウム量の低下により転倒時には容易に骨折する可能性が高く、治療にも時間がかかる。
睡眠－休息	<ul style="list-style-type: none"> ・本日は数種類の検査があり、疲労感を訴えている ・午後からは風邪症状も現れ、倦怠感が強い ・夜間は排尿のため1回は覚醒する 	検査による疲労感を訴えており、複数の検査が同日に実施されたことにより十分な休息がとれていなかったことが考えられる。さらに風邪症状による倦怠感も加わりエネルギーが消耗した状態であったと予測される。
認知－知覚	<ul style="list-style-type: none"> ・近視と老眼があり眼鏡を使用 ・眼瞼下垂による視野の狭まり ・日常生活は自立 ・症状は固定しない ・夜間排尿 	視力の低下、眼瞼下垂により周囲の障害物に気づきにくく、夜間の排尿時は病棟の照明が日中に比べ薄暗いことから見えにくい。症状が固定しないことから、自己の活動能力を誤認する可能性がある。さらに夜間の中途覚醒は、認識力が低下しやすいため自己の身体状況を誤認する可能性がある。
役割－関係	・入院3日目	遠慮・気兼ねから自分から看護者に介助を求めてくることは考えにくい。
自己知覚－自己概念	<ul style="list-style-type: none"> ・不自由はあるものの生活は自立している ・症状の日内変動あり 	自分の疾患に関する受け止めに關しては、情報はない。しかし、徐々に動きの悪くなる疾患であることから、病状に対しての受け止めを確認しつつ、援助の内容を検討していく必要がある。
コーピング－ストレス耐性	情報なし	
価値－信念	情報なし	

(統合アセスメント)

身体的状況として、63歳の初老の女性であること、筋無力症の症状が6ヶ月前から出現していたことによりすでに筋力低下をきたしており、視野狭窄・視力低下により障害物に気づきにくく、ベッドから降りる際の転落や歩行時の転倒には注意する必要がある。本事例は、夜間排尿をコントロールするため水分摂取を控えたり、症状にあわせてベッド上で過ごすなど自立・自律した患者像が読みとれる。こうした患者において、排泄は特に自尊心に関わる行為であり、夜間、多少症状が強くても自力で行いたいと思うのが通常であり、自発的に行動することが考えられる。しかし、症状に日内変動があり、夜間は症状が強くなることから、本事例の自力でのトイレ移歩行が可能であるという判断が誤っていることが予測される。この日は数種類の検査による疲労感があり、加えて風邪症状による倦怠感もありエネルギーが消耗し、活動性が低下している状態にある。したがって夜間のトイレへの歩行時、特に歩き始めの往路には転倒の危険性が高い。

夜間の病棟の環境に関しては、トイレまでの距離が10mと離れているためエネルギーの消耗している本事例にとって容易に移動できる距離とは考えにくい。さらに夜間の病棟の照明は、日中に比べ薄暗いため、障害物に気づきにくく視野・視力の低下した転倒のリスクが高い環境といえる。

準夜帯は勤務する看護人員が少ないため、日常生活が自立している患者に目が届きにくい現状がある。そのため苦痛を持ちながらも自立した日常生活を営んでいた本事例においては、歩行の状況確認などが不十分になる可能性がある。

Ⅲ 結 果

1. 対象学生の着眼点とアセスメントの特徴

対象学生の記述内容から着眼した機能パターンを分類すると、「身体機能面のみに着眼したもの」と「身体機能面以外にも着眼したもの」に大別できた。また、転倒事故の予測の導き方に関しては、情報の関連性を結びつけずに事例に表記されている情報から直接的に結論を導き出す傾向の「直結型」の学生と複数の情報を結びつけ、意味づけながら予測する傾向の「複合型」の学生が存在した（表2）。以下、それらの特徴について述べる。

表2 対象学生の着眼点とアセスメントの特徴

n=18

アセスメントの傾向 着眼した機能面	直結型	複合型	計
身体機能面のみに 着眼したもの	12 (66.7%)	2 (22.2%)	14 (77.8%)
身体機能面以外にも 着眼したもの	1 (5.6%)	3 (16.7%)	4 (22.2%)
計	13 (72.2%)	5 (17.8%)	18 (100%)

1) 身体機能面のみに着眼した学生のアセスメント内容の特徴

18名中14名（77.8%）と約8割の学生は、事例に記述されていた上下肢の脱力感や摺り足様の歩行といった運動機能、老眼や近視、眼瞼下垂といった感覚機能を中心とする人間の身体機能面に着眼してアセスメントしていた。その他、排泄や栄養といった機能面にも着眼している学生も存在したが、いずれも身体機能面のみで転倒事故を予測していた。さらにこの学生達のアセスメントについて、対象者の把握の程度と転倒リスクの関連性を分析すると、事例に示した身体症状のみで直接的に転倒を予測する学生とその日の症状の強さや環境要因を関連づけながら予測する学生がいた。これらの学生の着眼点とアセスメントに関する

記述内容の主なものを表3に示した。

身体機能面のみに着眼した学生14名中12名（66.7%）と全体の7割近い学生は、筋力低下や感覚機能の低下といった身体症状と転倒事故への結びつけに関する記述は見られず、身体症状があることそのもので転倒がおきやすいと結論付けた記述であり「直結型」の思考傾向であった。14名中2名の学生は、着眼している情報は身体機能面のみであるが、複数の身体症状やその日の検査による疲労、トイレまでの距離、必要量のエネルギー摂取ができていないこと等の要因が複数重なることにより転倒リスクが高まると記述しており、「複合型」の思考傾向であった。

2) 身体機能面以外にも着眼している学生のアセスメント内容の特徴

18名中4名（22.2%）と約2割の学生は身体機能面以外に、事例に記述してある運動機能や感覚機能の低下に加え、患者の生活像にも着眼していた。さらにこの学生達のアセスメントの内容に関して、対象者の把握の程度と転倒リスクの関連性を分析すると、事例に示したいくつかの状況のみで直接的に転倒を予測する学生と症状の変化や検査による疲労、夜間の排尿に対する事例の感情など療養生活全体を検討しながら転倒を予測する学生がいた。これらの学生の着眼点とアセスメントに関する記述内容の主なものを表4に示した。

身体機能面以外にも着眼している学生4名中1名の学生は、夜間の排尿時に急いでしまったり、症状が固定しないことから無理をしてしまったりするなど、患者の日常の生活像に加え、夜間の中途覚醒による認知能力の低下など人間の行動特性に関しても記述していた。しかし、記載方法が箇条書きであったためにそれらの関連性については読みとることができず、「直結型」の思考であると分類された。4名中3名の学生は、症状が強く現れていることに加え、排泄行動に関する本人の心理状態や排泄に伴う焦り、症状の変化による自己身体機能の誤認といった人間の行動特性と環境要因を関連させて転倒事故を検討していた。なかには、筋無力症と加齢のためにすでに筋力が低下していることや自分の体調管理をしながら自律して生活していること

表3 身体機能のみに着眼した学生14名の主な記述内容

アセスメントの特徴	記 述 内 容
身体症状のみで直接的に転倒を予測 (14名中12名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 下肢に脱力感があるということで、転倒しやすい状況にあると考えられる。 ・ 上下肢に力が入らず、立ち上がりがつらい状態であるためベッドからの起きあがり時に転落する。 ・ 筋力が低下しているため容易に転倒してしまう。 ・ 摺り足歩行であるため少しの段差でつまずく。 ・ 目が見えづらくなっていることから、段差や椅子、ベッドの足などにぶつかりやすい。 ・ トイレに行くときなどに転倒する。上肢に力が入らないためとっさの時に手すりにつかまれない。
複数の身体症状から転倒リスクが高まると予測 (14名中2名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 視力低下・視野狭窄があり、筋力も低下し、摺り足歩行であるため障害物やわずかな段差にも気付くことができず、転倒してしまう危険性が高い。また、洗面所と病室の距離が遠いため疲労を増強させ、さらに転倒の危険は高くなる。 ・ 検査などが続き、疲労感が強く、食欲低下もあることからエネルギーが足りなくなり疲労感の増強になる。

表4 身体機能以外にも着眼した学生4名の主な記述内容

アセスメントの特徴	記 述 内 容
着眼した情報間の関係性が不明 (4名中1名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ トイレが近い→トイレに急ごうとすることによって転倒しやすい。 ・ 夜間頻尿→夜間は見えにくくなるとともにトイレに急いでしまったり、寝ぼけることもある。 ・ 症状が固定しない→無理をしてしまう。
療養生活全体を検討しながら予測 (4名中3名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 症状が強い日はベッド上で過ごすようにしていたが、準夜のナースが見たとき眼瞼下垂が強くなっており、症状が強かったことが考えられる。夜間は暗く、いつも以上に見えづらいことや摺り足歩行であることで転倒してしまう。また、夜間排尿は眠りから覚めたところで意識や動きが悪いことも転倒の原因になる。 ・ 夜間は暗いため特に見えづらく、さらにトイレに行くのを面倒と感じており、ぎりぎりまで我慢してから移動することにより焦った行動から転倒する危険性がある。苦痛の日差や、日内変動があり症状が固定していないことから自己の身体認識と実際の身体機能間にギャップがあり、転倒につながる。 ・ 筋無力症、運動量が少ないこと、加齢により運動機能が低下している。加えて熱や咳嗽、食欲低下により身体機能が低下している。本日は検査が多く疲労しており転倒しやすい状態にある。 ・ 調子の良い日は自律して生活している。さらに患者自身も調子の良いときと同じ感覚で動いている可能性もあり、動けるという思いや他人の手を借りたくない気持、気兼ねなどにより無理をしてしまう可能性がある。

から動けると思いたい気持ち、他人の手を借りたくない気持ち、気兼ねなどにより無理に動こうとすることを予測しており、対象者の全体像と人間が本来持ち得る心情を照らし合わせて転倒事故の予測をした学生も存在した。この3名の学生達はいくつかの情報から転倒を予測した記述をしており、「複合型」の思考傾向であった。

2. その他の要因に関する着眼とアセスメントの特徴

病棟の環境要因に関しては、事例に表記されていた、病室からトイレまでの距離が遠いことに関しては18名中13名(72.2%)と約7割の学生が着眼していた。一方、事例には直接表記されていないが、夜間であることから病棟照明が日中よりも暗いことを予測しながら転倒のリスクを検討した学生は8名と約半数以下であった。

これらの着眼点とリスクの結びつけ方を見ると、「トイレまでの距離があるため転倒してしまう危険が高い」「夜間は暗いため転倒の危険が高くなる」など、トイレまでの距離や夜間照明が暗いことを直接的に転倒の要因とする学生と「この日は、微熱、風邪症状も現れ、倦怠感も強い状態でのトイレまでの10mは長く、疲労によって転倒してしまう危険性が高い」「夜間排尿時は周囲も暗く、面倒と感じていることから我慢をしたり、焦った気持ちでトイレに行くことも考えられなおさら転倒の危険は高くなる」などいくつかの要因を関連させて転倒事故が発生しやすいことを総合的に判断する学生がいた。また、事例に示した病棟環境には全くふれなかった学生は1名であった。

本事例の設定が夜間帯であることに着眼して、日中より看護者が少ないといった人的環境要因を事故発生の要因と考えた学生は存在しなかった。

IV 考 察

今回の調査では、療養者の転倒事故の予測に関する記述内容から、学生の対象者への着眼傾向とアセスメントの特徴および事故発生にまつわるその他の要因に関しての着眼傾向が明らかになったので考察する。

1. 学生の対象者への着眼傾向とアセスメントの特徴

今回使用した全身の筋力が低下し、消耗性疲労により活動性が低下している筋無力症患者の事例に対し、事例内容に記述されている筋力低下や感覚障害などの身体的症状に関しては対象学生全員が着眼していた。しかし、約8割の学生が身体機能面のみに着眼し、転倒事故を予測しており、トイレに行くのを面倒と感じていることや、自分で生活をコントロールしている人にとって援助を求めることは気兼ねや遠慮があるなどの心理的側面に目を向けていた学生は約2割にすぎなかった。すなわち、紙面に表現され直接目に見える身体症状に着眼しやすく、直接表現されていない心理状態等には気づきにくい傾向があることが明らかになった。

また、情報の結び付け方に関しては、18名中13名(72.2%)と7割の学生が一つの情報から直接的に結論を導き出す「直結型」であった。この学生達は、事例内容に表記されている筋力低下や感覚障害という情報から、よろけたりつまずいて転倒する、障害物に気づかずぶつかるなど、単一の情報のみで転倒事故を結論付けていた。いくつかの情報を関連づけて転倒事故を予測したり、複数の要因が重なり合うことで転倒のリスクが高まるといった結論の導き方をした「複合型」の学生は約3割であり、学生の思考の特徴として少数の情報から直接的に結論を導き出していく傾向が強いと思われた。こうした身体症状に着眼しやすく、

「直結型」の思考傾向は先行研究における学生の特徴と同様の結果を示している。すなわち、学生の対象把握におけるアセスメントの傾向は、身体症状や治療・検査に着眼しやすい傾向⁵⁾であることや情報分析の段階で情報間の関連性を考え、問題とその原因を明確にすることが出来ない⁶⁾といった指摘と同様のものである。さらに、経験年数の浅い看護師が患者の判断力の低下や患者本人の自覚など患者に内在するアセスメントに関して経験年数の多い看護師に比べ有意に不足していた⁷⁾という傾向とも類似している。

転倒事故に関する調査では、高齢者の深夜の排泄に関与するものが多く、その理由として中途覚醒により失見当状態の上に筋力が低下しており、昼間の排泄行動と一致しないことや排泄に伴う転倒事故の多くはトイレまでの往路に多く発生しているといわれている⁸⁾。すなわち転倒事故には、自力で自分の習慣である行動をとりたいという患者の自立心や闘病意欲といった心理的要因に加え、夜間の中途覚醒は通常でも判断力が低下すること、夜間の排泄が切迫した状態でトイレに向かう傾向があるなど人間の行動特性が大きく関与している。したがって、転倒を予防するためには、症状や検査データなどの目に見える客観的データからのアセスメントだけではなく、目には見えない患者の習慣や意志といった主観的データ、さらには人間の行動特性をアセスメントし、複合させて、療養者の行動を推測していく必要がある。今後、転倒事故につながる療養者の行動を予測するため、情報を多面的にとらえ、情報全体を統合させていく能力の育成を検討する必要性が示唆された。

2. 事故発生にまつわるその他の要因に関しての着眼傾向

環境要因のうち物理的要因に関しては病室とトイレまでの距離について、約7割の学生が着眼していたが、夜間帯であるという情報から事例に表記されていない病棟の夜間照明が薄暗いことを想起した学生は半数以下であった。また、看護体制などの人的環境要因に目を向けた者はいなかった。学生の傾向として直接事例に表現されている情報に着眼しやすいことはすでに述べたとおりである。こうした傾向は、臨地実習では夜間の実習体験がないことや複数の患者を同時に受け持つ経験がないといった実習形態に影響されていると推察されるが、今回の調査では明らかではない。しかし、療養者の安全を守るためには、基礎教育の段階から療養環境上の物理的・人的環境要因に目を向けさせることは重要であり、学生がこうした傾向を有していることを前提に今後の転倒事故防止教育を検討する必要性が示唆された。

3. 今後の課題

今回の調査方法に関しては、学生の記述内容をデータとしたため、記述能力の差により学生の記述内容がアセスメント内容と必ずしも一致しないという研究の限界を有している。一方、調査対象に関しては、4年次学生54名中同意

の得られた18名と約3割の学生を対象とした調査であったが、先に述べたように先行研究で明らかにされている学生の着眼・思考の傾向や経験年数の少ない看護師のアセスメント傾向との類似性が見られたことから、ほぼ卒業時の学生全体の傾向を示しているものと推測される。今後は調査方法や調査時期を検討し、学生のアセスメント能力の実態をより明確にしていく必要があり、こうした調査結果を研究対象者にフィードバックするなど、具体的な教育方法を構築していくことが今後の課題である。

本研究は平成15～17年度文部科学省研究費補助金（基盤研究C）の助成を受けた研究の一部である。

引用文献

- 1) 高橋知子, 川村治子: 多様な背景要因から転倒・転落事故を予測する. *Nursing Today*15 (9): 20-24, 2000
- 2) 川村治子: ヒヤリ・ハット11,000事例によるエラーマップ完全本. 東京, 医学書院, 2003, p66
- 3) 前掲書1) p21
- 4) 川島和代: 高齢者の転倒を防ぐためのナースの判断過程. *エキスパートナース*12 (6): 28, 1996
- 5) 金城やす子, 小島洋子, 片川智子: アセスメント能力にそった実習指導のあり方-事例展開による3年課程・2年課程のアセスメント能力の評価-. 第34回日本看護学会論文集(看護教育): 121-123, 2003
- 6) 南妙子, 近藤美月, 岩本真紀ほか: 看護過程における思考能力育成のための教授法の検討-初学者における事例分析の思考の特徴から-. *香川医科大学看護学雑誌*5 (1): 25-35, 2001
- 7) 川口はるの, 深見優子, 村上和美ほか: 看護師の経験年数による転倒・転落に関するアセスメント能力の違い. 第34回日本看護学会論文集(老年看護): 65-67, 2003
- 8) 前掲書2) p73